

古代史シリーズ1

「日本の古代文化とその伝道者」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

日本の文化は縄文時代から連綿と続く積み重ねの文化になっています。現代にも通じる平安時代から江戸時代に至る国風文化を知って古代を学ぶことで日本の文化の理解が深まります。

十数年前に大学での講義のために記紀を読みました。その時の素人の観点で古代史の素人の方向けにまとめてみました

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカー」の田やコンサルタントが専門でした。二十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれませんが。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元田としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

日本の文化は縄文時代（一万五千年前）から現代までの積み重ねで築かれている特徴がありますが、日本にいますとその文化が何かも意識しないで過ごしています。

古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」では、現代に色濃く表れている平安から江戸時代の文化、そしてその文化を形作った奈良時代までの古代の歴史と施政を全体俯瞰して、古代史の基礎知識を習得します。

本書は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用した主要参考図書は次の通りです。

- ＋「古事記」 竹田恒泰（学研）、「日本書紀」 宇治谷孟（講談社）
- ＋「13歳のための 世界と日本の見方」 松岡正剛著 春秋社
- ＋「日本の歴史 本当は何がすごいのか」 田中英道著 扶桑社
- ＋「古代史の謎は「鉄」で解ける」 長野正孝著 Rinsen 新書 など

本冊子の古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

◎ 古代史シリーズ1 「日本の古代文化とその伝道者」の目次 ◎

第一章 「歴史の伝道師と精神文化」 4

日本文化の伝道師と歴史の捉え方の視点を知り、現在の精神文化の基礎にある
国風文化としての平安文化を探ります。

第二章 「鎌倉から江戸時代の日本文化」 21

日本文化の伝道師とその変遷から古代の位置づけを抑え、現在の精神文化へと
成長させた鎌倉時代から庶民文化の江戸時代までのポイントを解説します。

第三章 「日本の古代(倭)の文化」 40

古モンゴロイド移住から縄文・弥生文化の成立ちの出来事を抑え、日本人のルーツを
探っていきます。

第四章 「古代(倭)から大和へ」 53

日本文化の基礎作りをした古代大和朝廷(纏向遺跡)、倭(ヤマト)から日本に生まれ
変わっていく大和朝廷の誕生を探索します。

第五章 「飛鳥・白鳳・天平文化」 67

平安時代に繋がれていく日本文化の礎を作った飛鳥・白鳳・天平文化と天皇の施政
の関係性を捉えます。

◆第一章 「歴史の伝道師と精神文化」の目次

第一話 人間と文化の関係を掴む 5

文明と文化の違い

語り部と聞き手の関係

プロクセミクス・文化距離感覚

人間文化のスタート

文化は感情の発散を統制することで生まれた

第二話 語り部の伝える物語には母系がある 10

英雄伝説の母系

一神教と多神教は自然環境から

第三話 理性脳は哲学を生み出した 13

ギリシヤ哲学

東洋の哲学

第四話 平安時代の文化と伝道師 15

平安文化の背景

平安文化の特徴

コラム…仏陀の悟り 20

第一話 人間と文化の関係を掴む

第一話は、二三方の著書、松岡正剛氏の「世界と日本の見方」と田中英道氏の「日本の歴史本当は何がすごいのか」、梅棹忠夫氏の「情報の文明学 中公文庫」を基本に話を構成し進めている。最初の「文化」と「文明」のテーマの定義は、梅棹忠夫氏の「情報の文明学 中公文庫」からの引用します。

日本の代表的な文化人類学者であつた梅棹忠夫氏^注は「文化と文明」を定義された。「情報の文明学 中公文庫」の中で、「文化は文明のもとに作られていくものだ。」と述べられ、「文明」と「文化」を定義している。（注）梅棹忠夫の略歴は、日本の生態学者、民族学者、情報学者、未来学者。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、京都大学名誉教授、理学博士。従三位勲一等瑞宝章。日本中東学会初代会長を務められた。

文明と文化の違いから整理します。

文明とは、「人間を取り巻く装置系と制度系そして人間が作るインフラであり、足し算の生活文化である」と梅棹氏は定義している。

「文明は文化を生み出すための装置系と制度系」とは、鉄道、電気設備、自動車、スマホ、インターネットなどのインフラを装置系と捉え、法律、業務規程、セキュリティ規制、国会などは制度系と捉えているということである。

つまり、生活する上での枠組み、フレームワークである。文明は何か文明のフレームワーク（基礎インフラ）があると、それに追加の機能を加えてさらに高度なフレームワークへと発展していくことになる。

たとえば、電話は、インターネットが開発されて携帯電話、スマートフォンへと発展した。かつての大砲は、ロケット、大陸間弾道弾、宇宙ロケット、宇宙ステーションへと発展している。文明は将にどんどん追加され発展する「足し算の文化」と言うことが出来る。

一方、文化は、「精神面における価値体系として現れるリフレクション、すなわち、文化の問題はすべて文明の問題から派生するものであり、引き算の生活文化である。」と定義している。

リフレクションというのは日本語では「反射」である。文化を精神的な価値を映し出したものと捉えたということである。

日本の代表的文化に「茶道」、「華道」、「料理」を例に取り上げてみましょう。

茶道は、千利休が訪れた客や友に茶を喫して退出するまでの全てを、「一期一会」の充実した時間とする「もてなしの空間」に作り上げた。そのことは、お茶を飲むことを一期一会で心を通わせる精神文化に高めたということになる。

華道は、おもてなしと心のゆとりのための「生け花」という自然を屋内に取り込み楽しむ文化を、「自らの美しい心と繋がり、心を磨き高める道(どう)の文化」に高めている。

料理は、人が生きるために食べる、食事するということから、懐石料理のように目で楽しみ食するというような満腹感のみではない精神的満足を作り出している。

「茶道」、「華道」、「料理」では、素材、陶器や容器、作法が文明で、作法の熟達・改善による精神的価値観を作り出す文化に仕立てたことである。これは精神的価値を高めるモノを求めて絞り込んでいく「引き算の生活文化」と言える。

さて、文化と文明の違いをみてきたが、この文化は世界の国々でみると全く異なった発展を遂げている。何故異なった文化になるのか、この異なる文化は如何にして作られるのであろうか？

この問いに応えるには、人間の特性を踏まえてその要因を考える必要があります。

まず、その人間の特性を文化を伝える語り部(伝え手)と受け手(聞き手)の関係から捉えてみましょう。

人は同じことを聞いても聞き手の理解度によって解釈が変わるし、伝え手が如何に伝えたかによっても聞き手の解釈が変わることにある。たとえば、伝え手が「ここではきものをぬいでください。」と言ったとする。

聞き手には「此处で、履物を脱いでください。」と解釈する人と、「此处では、着物を脱いでください。」と聞く人の二通りの解釈が出てくる。情報を区分して聞き取っていく「情報の区分子」が聞き手で異なるからである。

一方、語り部も価値観によって伝える内容を編集して伝える。たとえば、覇権争いを征した王が後世にその伝記を残そうとして語り部となったとしよう。その王は「如何に正義を貫き、国を統一し、善政を施してきたか」は伝えようとするが、都合の悪いことは書かないように伝えることになる。つまり、語り部が編集してその内容を伝えていることになる。作られてきた文化の伝承も同様な伝承になるので、それぞれの部族やそれぞれ国で異なった文化が出来上がっていくことになる。

また、距離が離れても、それぞれの国で文化は異なってくるが、「何故なのか?」、これをプロクセミクス(文化距離感覚)と言う。二つ目はプロクセミクスを取り上げます。

プロクセミクス(文化距離感覚)とは、距離が離れると文化が変わるということであり、プロクセミクス(文化距離感覚)による文化解釈の違いが出てくる。それは距離が離れるとそれぞれの人の認識も変わり文化も変わっていくことにある。

遠くから見ていた時は美人に見えたんだが、近くではそれほどでも、...というのは良くある。つまり、距離が離れると見え方・解釈の仕方が変わっていくことである。このことは、それぞれの国で異なる言語を持っていることからでも容易に想像

できる。それぞれの民族が遺伝子として組み込んできた感覚である。たとえば、

秋に欧米で窓を開けて会議を行っていると、日本人には虫の声がうるさいほどに聞こえる。そのことを同席している欧米人に「虫の声がうるさいね。」と言うと、「どこに？」と怪訝な顔をされるそうです。よく聞く話である。日本人は和歌や俳句にも歌われるように重要な音と捉えているので聞こえるが、欧米人にはそんな文化はないので、虫の音は雑音の部類で音をシャットアウトする。そんな遺伝子や脳内回路が出来上がっているのかもしれない。

この類の例には事欠きません。

日本では、誰かにこつちにおいでと右手を上下にひらひらさせますが、アメリカで同じ動作をすると、跳ね上げる手の動きを見るので「あつちへ行け」、「出て行け」という意味になる。

また、私たちが手で数を数えるときは、広げた指を親指から閉じていつて「いち、に、さん、し」と教えますが、アメリカでは逆に最初に全部の指を折って親指から順に広げながら「ワン、ツ、スリー」と教える。

国による文化認識の違いをみてきましたが、日本国の中で捉えても多くのプロクセミクスがある。「ラーメン」を例にとろう。ラーメンはもと中華そばであるが、プロクセミクスによつて日本産に変わった。国内で見ても、とんこつ・細麵の博多ラーメン、醤油・中麵の東京ラーメン、こつり・スープ縮れ麵の札幌ラーメンなどをみると一目瞭然である。

人間だけが持つ文化を作る能力にはプロクセミクスによる遺伝子の特性が組み込まれていて文化が作られているということになる。

三つ目は、文化を作り上げていく人間自身です。それは他の動物と異なり文化を作り上げる特性を備えて生まれてきているということである。他の動物と異なる特性として「二足歩行」、「手を使える」、「並行視・パララックス」、そして、「ネオテニ」（幼形成熟）と「後天的な刷り込み（インプリンティング）」を持っていることで文化を創り出した。

人は、「二足歩行」を行うことで他の動物とは異なり文化を感じるようになった。それは他の動物のように四つ足で歩くと思考できないことが試行してみるとすぐに理解できる。また、二足歩行をすることで、手が使えるようになり、並行視（パララックス）ができるようになった。

また「手が使える」ようになることで、指を折つて数を数えるといった「数」の概念を人間は獲得し、道具を使い、縦横の線を使って図や文字が表現できるようになる。横の線書きは人間に最も近いといわれるチンパンジーに鉛筆を持たせると縦線は書けるが横線は書けないし、人間の幼児も苦手である。これはサルだったころのプラキエーション、すなわち、二本の腕を

使つて木の枝にぶら下がりながら渡っていくときの前後に手を動かす記憶が残っているのであると言われている。腕を横に動かしたり振ったりする動作はヒトが人間として生まれて、その文化の中で学習したことなのである。

そして、二足歩行を始めたことで、目の位置は顔の正面だが、若干離れている。このことで遠くの木を見たり、素早く焦点を変えることが可能になった。人間の視野角度は二〇〇度程なので、正面を向いてもぼんやりと正面以外も見え、「並行して視（並行視）」えて判断し行動できる。一般の動物は目が横に付いたり、正面でも真ん中に寄っているため、遠くを見て素早く焦点を合わせることはできない。さらに、

二足歩行は言葉を生んだ。立ち上がったことで、四つ足の時は見えていたメスの発情期が見えなくなり、相手への伝達手段が必要になってきた。動物である以上、種の保存は最重要事項であり、相手に自分の意思を伝えるために言葉が生まれてきたと松岡正剛氏は分析する。

さらに、人間は、「ネオテニーとインプリンティング」という特性を備えている。

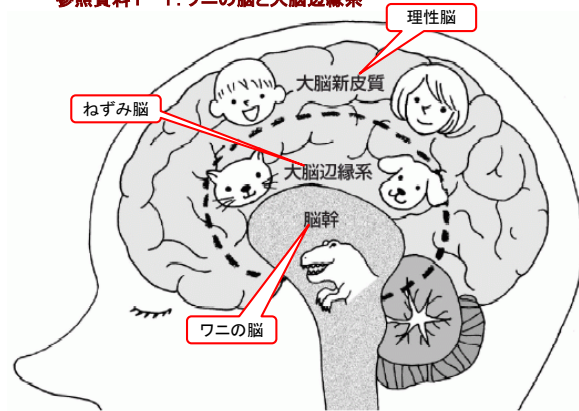
人間以外の動物は、誕生すると同時に立ち上がり、歩いたり走ったりできるようになる。そうしないと弱肉強食の世界では即、死を意味するからである。しかし、人間の赤ちゃんは出生時は何もできない。未成熟で生まれてきているので、もう少し歩きまで一年、言葉を使つて話せるようになるには三年かかる。

三歳が一つの節目で、三歳ごろで話せるようになるが、大人になつて三歳までの事を思い出そうとしてもその記憶は思い出せない。それは記憶が出来ていないのである。記憶がないということは自己が無いということと同じである。自己とは他者を認識することから出ていく。記憶がないということは、記憶回路や自己表現の回路が出来ていないために自己認識が出来ていないからと想定できる。三歳頃になつて、突然友達の話や身の回りの出来事を話し出すことから自己回路や物語回路がその頃に出来ることを顕している。

三歳からの人間は「後天的な刷り込み（インプリンティング）」で成長するように造られ、それは死ぬまで永遠に続く（ネオテニー）のである。何歳になつても生き生きと活動されている方々みると、そのような方々は行動的であり、勉強家である。つまり、人はその活動環境にある他人や他者を介して、学び、思考をしていつまでも成長するように造られているということを表している。

文化は感情の発散を統制することで生まれたと考えられる。なぜなら、人間の脳の構造から動物から人間に至った過程が形作られているからである。人間の脳は三種の性格を持った脳、動物から人間に至る発達過程の順に「ワニの脳」、「ねずみの脳」、「理性の脳」で構成されているのである（参照資料 1-1）。

参照資料1-1: ワニの脳と大脳辺縁系



「ワニの脳」とは、原始的動物のワニも有する動物共通の脳で、生存のための基礎的反射中枢（血圧、心拍、呼吸、姿勢など）の反射の機能のみを持つ。基礎的反射中枢の機能なので反射脳とも言われ、大脳基底核辺りにある「脳幹」をいう。「ねずみ脳」は、人間の脳で情動の表出、食欲、性欲、睡眠欲、意欲、などの本能、喜怒哀楽、情緒、神秘的な感覚、睡眠や夢などを司っており、さらに記憶や自律神経活動に関与している脳で「大脳辺縁系」をいう。ねずみのような賢い行動ができる動物に存在する脳である。

「理性脳」とは、ワニの脳やネズミ脳が発達すると攻撃や争いの絶えない世界になつていくが、為政者はこのような本能の暴走を抑えるための理性脳を発達させることで争いを無くそうとした。そのことが、宗教、舞踊、哲学、建築、文芸などの文化を発生させ、拡大させることになった。文化の始まりは「神への畏れ」から、「神を作り宗教」へと発展したところが始点になつたのである。

◆第二章 「鎌倉から江戸時代の日本文化」の目次

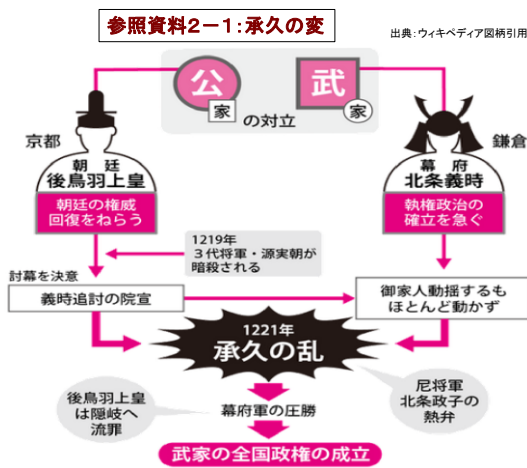
第一話 鎌倉時代の文化	22
執権政治	
鎌倉の仏教	
鎌倉の文学	
鎌倉の美術	
第二話 室町時代の文化	30
北山文化と東山文化	
もののあわれとわび・さび	
遊行ネットワークと寄合	
第三話 安土・桃山時代の文化	34
禅林文化から法華文化へ	
ルネサンスの利休とバロックの織部	
第四話 江戸時代の文化	36
コラム【御成敗式目】	38

第一話 鎌倉時代の文化

第一話は、松岡正剛氏の「世界と日本の見方」と田中英道氏の「日本の歴史本当は何がすごいのか」を基本に引用し話を進めます。

鎌倉時代は明治維新まで続く最初の武家政治時代である。源頼朝は、奥州藤原氏を一一八九年を滅ぼし、一一九二年鎌倉幕府を開いたが、十年後の一一九九年に頼朝は死去する。実権は執権の北条氏に移り、鎌倉の文化は北条氏によって作り上げられることになった。執権政治の始まりです。

源頼朝の死後、鎌倉幕府は老臣と京下りの官人を含めた合議制の政治体制を組織化するが、老臣間での内紛等があり、内紛を制した北条時政による執権体制が発足する。内紛と北条氏の圧力で、頼朝の息のかかった老臣、梶原氏、畠山氏、和田氏などが敗死する。一二一九年に三代将軍、源実朝が甥の公卿に鶴岡八幡宮で暗殺され、源氏の血筋が絶える。



この鎌倉の混乱を見て、後鳥羽上皇は鎌倉討伐を企て、北条義時(二代目執権)討伐の宣旨を一二二二年に発し、「承久の乱」が起こる(参照資料2-1)。院宣なので反抗すれば朝敵になることから御家人に動揺が広がります。少し前まで、天皇家の下で働いていたわけですから動揺は当然です。その動揺を抑えたのは北条政子による鎌倉武士への熱弁があったからです。

「心を一つにして聞きなさい。これが私の最後の言葉です。亡き頼朝公が朝敵を滅ぼし、関東に政権を築いてから、お前たちの官位は上がり禄高もずいぶん増えました。よい暮らしができるようになりました。すべてこれ、亡き頼朝公の御恩。その御恩は、海よりも深く山よりも高いです。今、逆臣の讒言によって、理に反した繪旨が下されました。今こそ頼朝公へのご恩を返す時。名を惜しむ者は、逆臣を討ち取り、三代にわたる將軍家の恩に報いよ。ただし朝廷側につこうという者があれば、それは構いません。早く行きなさい」

この天皇ではなく逆賊を誅するという言葉で御家人は奮い立ち団結を強め、朝廷軍を圧倒する。鎌倉幕府の執権政治が確立した時である。

承久の乱の平定後、後鳥羽上皇は隠岐へ配流、京には六波羅探題が京に置かれ朝廷は鎌倉幕府の監視下に入るようになった。さらに、武士が持つ荘園を管理する朝廷の土地（公領）の地頭権と地頭の土地を警備する守護権が大きく拡大したことである。そのことで、貴族が持つ荘園との争いが増えていくことになります。この守護権を持った家臣団から後に「守護大名」が生まれます。

三代目執権、北条泰時は一二三二年に「御成敗式目」を制定する（三ノム参照）。武士社会で作った最初法律である。基本的内容は、鎌倉武士団である御家人同士の争い、そして御家人と荘園領主との間の紛争を公平に裁く基準を制定した。武士社会の道徳的規定であり、江戸時代に「武家諸法度」ができるまで武士の道徳基準となった。

この公家社会から武士社会貴族へと揺れ動く時代に中で、宗教界でも大問題が発生していた。「末法思想」である。この末法思想の中で鎌倉仏教が勃興します。

鎌倉時代に最初に現れた新興宗教が浄土宗です。浄土宗（法然）の教えでは、「厭離穢土・欣求浄土（おんりえど・こんぐじょうど）」、この意味は「苦悩の多い穢れたこの世（穢土）を厭（いと）い離れたいと願い、心から欣ぶよ（こんで）清涼な浄土（仏国）を冀（こいねが）う」という教えである。この教えに言う浄土への道を説いてきた仏陀（お釈迦様）の教えが伝わらなくなるというのが末法思想である。

「末法思想」とは、釈迦の死後二〇〇〇年後にこの世の終わりが来るという仏教の歴史観で一〇五一年が末法の始まりとすることになる。平安の後期から末法の世界にあり、鎌倉時代はその真ん中にある。末法思想では釈迦仏滅以来の二〇〇〇年の期間を三時間、正法、像法、末法に三の時間に分割している。

「正法（しょうほう）」：仏滅から一〇〇〇年間（AC51年まで）の間を言い、釈尊の真理が直接伝わる時間。

「像法（ぞうほう）」：仏滅から二〇〇〇年間（AC51からAC1051年まで）の間を言い、教法、修行により釈尊の真理が伝わる時間。

「末法（まっぽう）」：仏滅から二〇〇〇年以降（AC1052年以降）を言い、釈尊の教えが伝わらず、及ばなくなる時間とする。そして、この末法の期間は釈迦が五十六億七千年後に再来するまで続きます。この釈迦不在の時間を補うため釈迦の代行として地藏菩薩が遣わされました。地藏菩薩は、「お地藏さん」の愛称で知られるが、「大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救う所から名付けられた」とされる。このような政治、宗教の混沌の中で鎌倉仏教が生まれる。

鎌倉仏教の誕生の背景は、末法思想の世になっても、京においては天台宗・真言宗の旧仏教は無力で、仏教界の腐敗・墮落

は甚だしいものであったらしい。人々は末法の世からの脱却を求め、新しい救いの教えを渴望していたことがある。さらに、鎌倉では京のような総本山(比叡山、高野山)からの締め付けは無く、幕府も新興宗教に対し寛容であったことがある。「法然の浄土宗」は、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば、誰でも極楽往生が約束されると説く。出家して僧侶になる必要もないため庶民に受け入れ易いものになった。

「親鸞の浄土真宗」は、法然の弟子として、親鸞は浄土宗を庶民にもっと受入れ易いものへ変えていく。僧侶でも肉食妻帯を認める。さらには、歎異抄で「悪人正機説」を唱える。悪人正機説とは、「善人なおもて往生をとぐいわんや悪人をや」という有名な一文で表される他力本願の教えである。他力とは「阿弥陀如来様」、本願とは誓願とも言われるように「約束」である。阿弥陀如来様の約束はすべての人を、必ず救う、絶対の幸福に「です。だから、親鸞は「悪いことして地獄に行く」と思っている悪人は、それでも極楽往生したいと思う時には阿弥陀如来様を頼って、南無阿弥陀仏を唱えすぎるしかない。ので、他力本願になる訳である。阿弥陀様におすがりすれば阿弥陀様が幸せにしてくれる」と解釈したのである。

親鸞は、庶民にとって、仏教を何でもありの馴染み易い宗教に作り替えたわけである。現在でも浄土真宗が最も多いのは納得できます。

「一遍の時宗」は、「吾が法門は熊野権現夢想の口伝なり」と時宗の開祖・一遍智真(ちしん)は語り布教する。

口伝とは、布教のために「南無阿弥陀仏」の名号札を配っていたが、一時、一遍自身に迷いが生じたとき、熊野大社本宮の証誠殿(しょうじょうでん)の前で自分の行いの是非に対する熊野権現の御意を請うたそうです。その時、熊野権現が現れ、「お前の勧めで一切衆生が往生するのではない。往生は既に阿弥陀仏によって決定しているのだ。信不信を選ばず、浄不浄を嫌わずその札を配るのだ」と口伝したことから来ている。名号札を受け取り、踊りながら念仏を唱える踊念仏として庶民に普及した。

「日蓮の日蓮宗(法華宗)」は、真言としての法華経に基づき「南無妙法蓮華経」の題目を唱えることで、

そのまま仏になれるし、国家も救われると説き開山した。そして、「立正安国論」を著す。南無とは「わた

くしは帰依します」ということを意味し、「妙法蓮華経」の五字は法華経の正式な題名である。「南無妙法蓮華経」の七字で「法華経の教えに帰依をする」ということを表している。浄土宗のように念仏を唱えれば往生できるのではなく、大日如来の教えである「真言」に帰依することで往生できるのだと説いた。

「阿弥陀如来などの念仏を禁止して正しい教えを広めなければ外国の侵略があり内乱が起こる」と一二六〇年予言する。浄土宗派などの抵抗で幕府からの法難も受けるが、ひるまない。ところが、予言通り一二六八年、元の使者が来日する。一二七四年、文永の役、一二八一年弘安の役が起こり予言通りの国難に遭遇する。この予言的中から、日蓮宗は大き

な信頼と支持を得ることとなる。後世に、日蓮宗は戦う宗教として武家や堺の商人などの先覚者から支援を得ることになる。

「禅宗」は、菩提達磨（ボーディダルマ）を初祖とし、ひたすら座禅によつて悟りを得ようとする宗教である。栄西による「臨済宗（りんざいしゅう）」とその弟子道元による「曹洞宗（そうとうしゅう）」がある。

栄西は、天台宗を中心に密教、禅を宋に学び、臨済宗を開く。伝教大師の天台教学の復興を目指した。

道元は、正法眼蔵を表し「修証一等（しゅうしやういつとう）」を説き、栄西を離れ曹洞宗を拓く。永平寺を開祖し、在家を相手でなく出家を基本とした。修証一等とは修行を目標として学べということである。

例えば、有名大学に合格することを目標とした学びは修証一等ではなく、学ぶという行動を目的とし、修行することから修証一等になる。目標を達成すれば終わりではなく、いつまでも成長し続けることが目標なのだと言っているのである。ノーベル賞を取るような人は後者の方が多く修証一等の実践と言える。

臨済宗と曹洞宗の違いは、曹洞宗と臨済宗の禅は、その思想の違いから、それぞれ『黙照禅（もくしやうぜん）』と『看話禅（かんわぜん）かんわぜん』と呼ばれる。

曹洞宗の黙照禅（もくしやうぜん）とは、ひたすら禅に徹するということである。曹洞宗の教義では本来、人には仏心が備わっていると考えている。そのため、どこかに悟りがあるのだとか、誰かに悟りを教えてもらうのだとかではなく、『自分自身の中にある仏心を見出すことこそが悟り』と考える。

臨済宗の看話禅（かんわぜん）とは、『公案』と呼ばれるお題問題を師匠が弟子に出し、公案に対して考え抜くことで答えを見出し、それにより『悟り』に近づくことができるという思想である。禅問答と言われるものである。これこそが代々『悟りを受け継ぐ手法』とされています。

鎌倉幕府の庇護のもとに、日本独自の鎌倉仏教が育ていきました。鎌倉時代の文学に目をやると、公家社会から武家社会への変化が公家社会の衰えを表した「はかなさ」、「無常」、「哀愁」を表現したものとして著わされたものが多く出てきます。

鎌倉時代の文学についてみていきましょう。四百年近く続いた宮廷文化の花盛りであった平安時代から武家社会に移っていったのですから、人々に大変な衝撃を与えたであろうことは想像に難くありません。時代の変化に際して起こった争いを描いた軍記物語が出てきます。その他にも逸話集や和歌集、随筆が出てくるのですが、平安時代の宮廷や貴族中心の内容ではなく、庶民に目を向けた作品や世の「はかなさ」、「無常」、「哀愁」を著した感性度の深い作品が表されます。

「軍記物語」は、平家物語、保元物語、平治物語などが代表的です。

「平家物語」は、冒頭の「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」の記述が世の「はかなさ」、「無常」、「哀愁」を顕した一文として有名です。

若干注釈を加えますと、祇園精舎きおんしようじゃとは釈迦が説法を行ったところです。その沙羅双樹（さらそうじゅ）の花の色の時間的変化を盛者必衰の理を割り当て、平家が滅んだことを風の前の塵の如しと例えているのです。何度読んでもその無常を感じさせる一文です。

「保元物語」は、一一五六年に起こった保元の乱の顛末を描いた作者不詳の軍記物語である。

鳥羽上皇の皇位継承問題で発生した争いで、後白河天皇と崇徳上皇で争い、後白河に源義朝と平清盛が就き、勝利する。崇徳上皇は讃岐へ流刑となる。

「平治物語」は、平治の乱の顛末を描いた作者不詳の軍記物語である。保元物語の姉妹作品であり、同一の作者であろうと言われている。藤原通憲（みちのり）と藤原信頼が、保元の乱での賞与などで平家の圧迫に不満を覚えていた源義朝を語らつて挙兵するが、後白河法皇と平清盛に平定される。源氏の総大将の源義朝は家人に謀殺され、子の頼朝は配流されるが源氏再興まで記述している。

「逸話集」では、庶民の生きざまを生き生きと描いた庶民文学、今昔物語がある。十二世紀初めの成立である。天竺（てんじく・インド）・震旦（しんたん・中国）・本朝（日本）の三部に分かれ、一千余の説話を収める日本最大の古説話集である。

「わらしべ長者」、「カモの導き」、「羅生門」などが良く知られる。

「和歌や随筆」では、新古今和歌集、方丈記、徒然草などがある。

「新古今和歌集」は、後鳥羽上皇が藤原定家に命じて作らせたもので、鎌倉最初の勅撰（ちよくせん）和歌集である。この和歌集は心の清新さを追及する新しい様式を作っている。新興文学である連歌・今様に侵蝕されつつあった短歌の世界を典雅な空間に復帰させようとした歌集であり、古今以来の伝統を引き継ぎ、かつ独自の美世界を現出したものである。

藤原定家の父である俊成が和歌を批評する言葉として用いていた「幽玄」という概念を、定家が発展・確立させました。

「幽玄」とは、「物事の趣が奥深く、はかりしれないこと」という意味があり、高尚で優美、気品があるさまを指し、和歌のみにとどまらず、日本の中世における美的観念の礎となった。

和歌の「花さそふ比良の山風吹きにけり」ぎ行く舟の跡みゆるまで（宮内卿）の句は桜の花弁が湖面を覆い、舟跡を残す美しい情景を想起させることから美の極致（幽玄）を表していると言われている。

参照資料2-2:世親像、無着像



出典:ウィキペディア図柄引用

「方丈記、徒然草」は、それぞれ、鴨長明と兼好法師の作である。清少納言の枕草子とともに三大随筆と言われるが、枕草子とは異なり、共に時代のはかなさと「無常」をつづる。方丈記では、有名な一文がある。

「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」というはかなさと無常観を的確な筆致で表現し、現代人さえも感嘆させ続けている。

徒然草は、「つれづれなるままに……」に始まる小序のほか、二三四段からなる作者の随想、見聞などを順不同に述べる。無常観に根ざす鋭い人生観、世相観、美意識を特長とし、おおむね短文ながら含蓄ある名文として知られる。

鎌倉の文学は平安時代の京を対象として著されたものが多く、世の「はかなさ」、「無常」、「哀愁」を表現したものが多いが、鎌倉での仏教美術には力強さや慈悲・救いといった表現が彫刻や仏像に見られる。

鎌倉の美術の代表は仏像彫刻である。鎌倉の仏像は最も優れた精神性を持っていると言われる。末法思想の真つ只中で武家社会を統制し、外敵とも戦つていかねばならない厳しさと時代を変わっていく苦悩に対する人々への慈悲や救いを表現した創造物になっているからである。

「彫刻」では、彫刻の天才と言われる運慶を頂点として、快慶、湛慶(たんけい)が現れ鎌倉美術・仏像彫刻を作り上げていく。運慶一派と言われるもので、その関係は運慶の弟子に「快慶」があり、運慶の息子に「湛慶」、そして運慶の弟「定覚」がいる。彼らは「仏師」と言われる。この仏師という言葉は中国や朝鮮にはない日本独自の言葉である。仏教や教義を理解し、受戒した僧侶が仏像を彫つたのである。同じ釈迦の像でもインド、中国、朝鮮の仏像とは異なり、芸術性の高い「冷静」を感じたり、何か超越的のものを求め続ける人間の表現があるのは仏師が彫つたからなのです。

「運慶」は、東大寺、興福寺の再建に参画し、監修とともに多くの彫刻を残しました。特に、無著像・世親像(興福寺)は、威厳と悲しみ、慈悲の表情をたたえた優れた肖像彫刻で、彼の代表作の一つです(参照資料2-2)。無著・世親とはインドで五世紀頃、に法相(ほっそう)教学を確立した兄弟です。法相(ほっそう)教学とは南都六宗の一つです。その教えに『手を打てば はいと答える 鳥逃げる 鯉は集

参照資料2-3:東大寺の金剛力士像阿行像、吽形像



出典:ウィキペディア図柄引用

参照資料2-4:釈迦像



釈迦修行情



釈迦如来像

出典:ウィキペディア図柄引用

まる「猿沢の池」という歌があります。ひとつの音でもこのように受け取り方が違ってくるということは「一人一人別々の世界があるということ」と述べ、一人一人に対応した教えが必要であるという教えである。運慶はこの教義を修得し、仏像を彫ったということです。無著像が西行法師をモデルとし、世親像が神護寺の文覚といった高僧をモデルとしたと言われています。その他には、八大童子(高野山金剛峯寺)、二童子像(静岡 願成就院)、毘沙門天像(逗子 浄楽寺)なども有名です。

「快慶・定覚」の代表作である「東大寺の金剛力士像」は、運慶の総指揮のもとに阿形(あぎよう)像を弟子の快慶、吽形(うんぎよう)像を弟の定覚を中心に運慶派仏師によって作られたと言われている(参照資料2-3)。荒々しい躍動感のある肉体表現で作られている。金剛力士は仏教の護法善神(守護神)である天部の一つで、開口の阿形像と、口を結んだ吽形像の二体を一対として、寺院の表門などに安置している。ヨーロッパでこのような躍動感が表現されるのは十七世紀のバロック芸術です。から、日本の芸術の先進性が見て取れます。

「湛慶」は、仏教の守護神である二十八部衆である婆藪仙人(ばすせん)に、魔和羅女(まわらによ)を制

作した。婆藪仙人は殺生の罪を犯したことにより生きながら地獄に落ちたが華聚(けじゆ)菩薩の力によって救われ地獄を脱し、釈迦の元に生き衆世を救うと誓ったといわれている。京都 妙法寺三十三間堂の国宝になっている。

日本の仏教美術の特徴は日本での代表的な仏像である釈迦如来像に見ることが出来る。その特徴は釈迦の表現を人間の形をした釈迦像に霊性を感じ、そこに人間個人

の死を見、苦しみを感じ、誰でもが悩みを語り掛けてくる対象として捉えようとしたことです（参照資料^{1）}。そのため、性的な観点を無くし、中性の像として作成しているし、仏像に多様性を持たせているのです。人間の感情に対応し、人間の瞑想的な像、超越的な像、憤怒の像など、超越的なものを求め続ける人間性の表現が芸術であることを日本の仏像は表現した。これが日本の仏教美術の特徴です。

「絵画」には、写実的な肖像画としての「源頼朝像」や絵巻物として「蒙古襲来絵詞」がある。

蒙古襲来絵詞は鎌倉時代後期の作で、肥後国の御家人竹崎季長（すえなが）が元寇における自分の戦いを描かせたものといわれている。歴史的事実の視覚的史料としても貴重な作品である。明治二十三年（1890）に所蔵していた熊本の矢野十郎から宮内庁が御買上げされた。

◆第三章 「日本の古代(倭)の文化」の目次

第一話 日本人のルーツ 41

古モンゴロイドと新モンゴロイド

縄文時代と弥生時代の環境

第二話 縄文時代の文明と文化 44

縄文時代の土器・土偶

縄文文明と世界四大文明の違い

第三話 弥生時代の文明と文化 47

弥生時代の土器・道具

弥生時代の集落

弥生時代の墓制

第四話 弥生文化と縄文文化の特徴 50

縄文文化の特徴

弥生文化の特徴

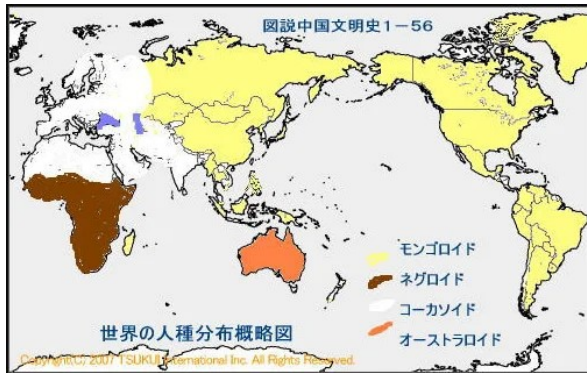
祖霊信仰と首長霊信仰

コラム【年代測定法】 52

第一話 日本人のルーツ

参照資料3-1:世界の人種分類図

出典:ウィキペディア図解引用



参照資料3-2:古モンゴロイドと新モンゴロイド

出典:ウィキペディア図解引用



「日本人はどこから来たのか?」この質問は永遠の命題に近い。しかし、他のアジア人と同じく、モンゴロイドといわれる人種のゲノムが多く見受けられることは定説になっている。モンゴロイドには古モンゴロイドと新モンゴロイドの二種類の人種がいたことも明らかになっている。

紀元前三万年頃のアジア人はモンゴロイドと言われ、アジア大陸南部で発生しユーラシア大陸、アメリカ大陸にまたがっている。当時はヨーロッパ大陸のコーカソイド、アフリカ大陸中南部のネグロイド、オーストラリアのオーストラロイド、そしてモンゴロイドの四つの人種で構成されており、黄色人種の祖になる環境適応力が強いモンゴロイドの分布が最も大きい参照資料3-1)。現在は租になるモンゴロイドと言われる。

古モンゴロイドの特徴は、背が低く、眉が濃く、角ばった顔と大きな目と高い鼻、ひげや体毛が濃いなどの特徴を持つ。彼らは氷河時代に日本列島に渡り、旧石器文化、紀元前一万五千年ごろに縄文文化を作った。

新モンゴロイド(中国系民族)は約一万二千年前にシベリアでモンゴロイドから分かれた。寒冷地に適するように長身で、細長い顔に小さな目と低い鼻、一重瞼、蒙古ひだなどの特徴を持った(参照資料3-2)。弥生時代に朝鮮を経由して青銅器や鉄器を伝えた。水稲の伝来は現在、遺伝子分析(SSR多型分析)から、中国長江中下流域から直接伝わったと考えられている。混血の度合いが少ない種族が縄文人で古モンゴロイドの特徴を表していると考えられている。

この新旧モンゴロイドによる縄文時代と弥生時代の生活環境を見てみよう。



参照資料3-3:ブナ林

出典:ウィキペディア図解引用



参照資料3-4:三内丸山遺跡

出典:ウィキペディア図解引用



参照資料3-5:火焔土器

出典:ウィキペディア図解引用

炎を象す精巧な造り



現代でも芸術品と崇められる土器である(参照資料3-5)。神への畏れを火の燃え盛るさまで表現し、祭祀用として作られたと考えられている。近年、彫刻家の故岡本太郎が「芸術は爆発だ」で大感激した土器芸術である。

縄文・弥生時代の自然環境を見ると、縄文文化は落葉・広葉樹林帯、弥生文化は照葉樹林帯の中で生活が営まれるそれぞれの文化が育っている。日本の森林は南から、照葉樹林であるカシやタブの林の「照葉樹林帯」、落葉や広葉樹林のブナ林に代表される「落葉・広葉樹林帯」、エゾマツ・トドマツ林などの「常緑針葉樹林帯」に三分類された樹林帯から成る。ブナ林の樹林帯は多くの果実が取れ動物の楽園になり、自然と共生する縄文人の生活のベースになっていた(参照資料3-3)。そのため、紀元前三五〇〇年から一〇〇〇年ごろまでの縄文文化は東北が最適の地であった。特に、青森の三内丸山遺跡(縄文中期:紀元前三五〇〇年から二〇〇〇年)や亀ヶ岡遺跡(縄文後期:紀元前一〇〇〇年以降)は縄文文化の花の時代を顕している。

三内丸山(さんないまるやま)遺跡では、通常の遺跡でも見られる竪穴住居、高床式倉庫の他に、大型竪穴住居が十棟以上、約七八〇軒にもおよぶ住居跡、大型竪穴住居では長さ33m、幅10mの共同作業場や集会所で使用したと思われる巨大竪穴住居がある(参照資料3-4)。そこから、多数の堅果類(クリ、クルミ、トチなど)の殻、さらには一年生草のエゴマ、ヒヨウタン、ゴボウ、マメなどといった栽培植物も出土した。この遺跡は当時としては巨大な集落で五百人位が共同生活を営んでいたと想定されている。出土品からは黒曜石(北海道や長野霧ヶ峰)、翡翠(ひすい:糸魚川産)、円筒土器(中国文明)、漆模様土器等があり、交易の大きな広がりが確認されている。同時代に新潟県の笹山遺跡から火焔土器が出土し、

小国が発生し始める。砂沢遺跡（青森県弘前市）などの遺跡にそれがみられる。



遮光土器（亀ヶ岡）

参照資料3-6：縄文時代の土偶

出典：ウィキペディア図柄引用



中空土偶（著保内野）



合掌土偶（八戸）

三内円山遺跡から二〇〇〇年ほど新しくなるが、縄文後期（紀元前一〇〇〇年頃）の亀ヶ岡遺跡から遮光土器が出土した（参照資料3-6）。

誕生した異形の子を見て、神からの何らかのメッセージとみて製作したものであろうと言われている。この土器は目にあたる部分がイヌイットやエスキモーが雪中行動する際に着用する遮光器（スノーゴーグル）のような形をしていることからこの名称がつけられた。

一方、弥生人は温かい照葉樹林帯のカシやタブの木（北限は富士の裾野などでも見られる）など日本の南部の温暖地域に定住する。彼等はタブの林を伐採し、灌漑施設を造り、田畑に変えていった。紀元前一〇〇〇年頃の水田跡が佐賀県の菜畑（なばたけ）遺跡や福岡県板付（いたづけ）遺跡などにみられる。北九州から水稻技術が伝播していった証である。紀元前一世紀中葉に関東地方に弥生文化が広まっただけから東北にも水稻耕作を受け入れる

◆第四章 「古代(倭)から大和へ」の目次

第一話 大和朝廷の誕生 52

大和朝廷の位置づけ

大和朝廷の誕生

第二話 大和朝廷の統一 57

聖徳太子までの大和

大化の改新から平城京遷都までの大和

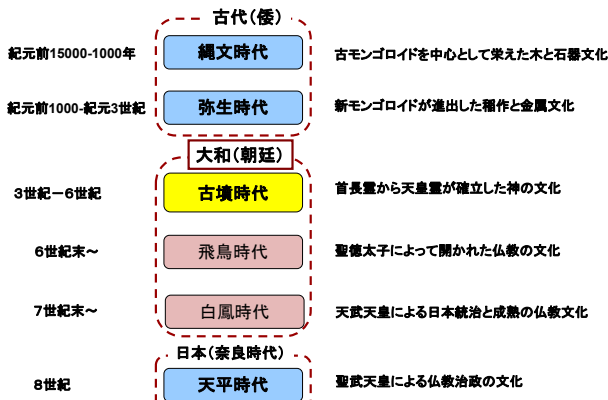
第三話 古墳文化の特徴 62

前方後円墳と三角縁神獣鏡

漢字と仏教の伝来

コラム【山の辺の道】 66

参照資料4-1:大和朝廷の位置づけ



第一話 「大和朝廷の誕生」

大和の基礎を作った纏向(まきむく)遺跡がある古代大和朝廷から日本の原点となる大和朝廷の誕生までの概要を鳥瞰します。第一話と第二話で、日本の成り立ちから古墳時代、そして大和から日本へ変わっていく奈良時代までの主要イベントを捉え全体像を掴みます。第三話では古墳時代の古墳文化の特徴を捉えます。

現在使用している「日本」という言葉は「倭(わ)」、「大和(やまと)」を経て「日本」と呼ばれるようになりました。そうすると、日本史というのとはおかしい表現で、古代を含めて表現するのであれば、倭・大和・日本史と言うべきかもしれない(参照資料4-1)。大和と言われる時代は大和に朝廷があつた時代を言っている。その辺りから大和の位置づけを見ていくことにする。

「大和」とはヤマト王権の本拠地である奈良盆地の東南地域が、大和(やまと)と呼ばれていた。古墳時代頃に漢字が入ってきて、「やまと」に「倭」を当て嵌めた、「やまと」の勢力が日本列島を代表する政治勢力となっていたことの顕れとされる。この「やまと」が「日本」と呼ばれるようになるまでの時代を整理しておこう。

「大和」と呼ばれる前は、「倭(わ)」と呼ばれた。この時代は縄文時代と弥生時代が該当する。縄文時代は紀元前一万五千年から紀元前一千頃までで、古モンゴロイドを中心として栄えた木と石器、土器、狩猟の文化である。弥生時代は紀元前一千頃頃から紀元三世紀ごろまでを言い、新モンゴロイドが移住し、稲作と金属の文化が作られる。倭の時代は中央集権的なものではなく、朝鮮・中国との交易を通じた交易グループやそのグループの連携が北九州、山陰、北陸、朝鮮南部に存在し、「倭」として総称されたと言われる。

大和の時代は、大和朝廷が奈良盆地に置かれ、天皇制が確立し、中央集権的な国家が形成されていく時代である。中国・朝鮮との交易が活発化し、彼等の文明・文化が取り入れられ、仏教文化が導入される。この仏教文化は古墳時代から飛鳥時代、白鳳時代の三つの時代文化を経て進化していく。この古墳時代は、首長霊から天皇霊が確立していく三世紀から七世紀初期ごろまでの時代である。仏教文化

は、聖徳太子によつて開かれた仏教文化が始まる「飛鳥時代」、次に大和時代末期の天武天皇による日本統治と成熟した仏教文化が花開く「白鳳時代」、そして最後が聖武天皇の「天平時代（奈良時代）」になる。聖武天皇による仏教政治による文化が栄える時代で、国分寺、総本山としての東大寺が創建され、あらゆる分野に仏教の影響が出てくる時代である。

最初の朝廷である大和朝廷の誕生を見ていきましょう。

古代大和が興った地域に海石榴一市（つばいち）跡から奈良への路である「^注山の辺の道」がある。この道に沿った地域は古代大和（大和朝廷の創成期）と言われる。（注 本書「ヨラム」を参照。大和の一豪族であつた王家が天皇として崇められ、墳墓は大和地域の長から、全国の長「天皇霊」として祭られるように変わっていく。この変化を年代的経緯を踏まえ大和朝廷の誕生を追いかけていきます。

約三万年前、北方（古モンゴロイド）から大量の移住者の手で旧石器文化が持ち込まれ、紀元前一万五千年頃から縄文文化（三内丸山遺跡、亀ヶ岡遺跡など）が作られていった。一万五千年前ごろは氷河期が終わつた時期に当たり、温かくなる。そういう環境の変化で縄文時代は東北が中心になる。この時期に火焰土器（かえんどき）などにみられる土器の文化が始まり、紀元前一千年頃まで縄文時代の文化が成長する。同一文化圏でこれほど続く文化の存在は世界に類を見ない。欧米の学者が縄文時代に注目するのも当然のことかもしれない。四大文明と言われる以前に異なつた文明・文化が日本で発達したことになる。生活環境は山の幸・海の幸に恵まれ穏やかで、戦いの痕跡である死体や破壊遺跡後がないことから戦が無い平和な時代であつたことが推測できる。

紀元前一千年前後に、中国長江流域からの移住者（新モンゴロイド）が水稻耕作をもちこみ、弥生文化を作つた。北九州を中心として最古の水稻栽培の遺跡があり、紀元前後には畿内への普及がみられる。

一世紀ごろには、北九州に小国が出来る。この小国は三世紀末まで大陸から入る鉄器、青銅器の大部分を独占していた。当時は北九州の伊都国（いとく）を中心とした国々（交易国家）が百余国あり、二世紀には倭国大乱があり、三世紀に卑弥呼によつて統一されたことが魏志倭人伝にある。邪馬台国はまだ存在していない時代である。

三世紀初頭から中葉の大和において、纏向遺跡が大きくなり始める。纏向（まきむく）は奈良東南部の桜井市から現在の奈良へ向かう道「山の辺の道」では、より古い遺跡が出土する三輪、柳本の中に位置する。先住の豪族を避けて新勢力として纏向に定着したと想像できる。この纏向遺跡の出土品からは大陸の影響がほとんど見受けられない。

同時代の北九州の遺跡では三世紀前の前漢鏡、銅矛、甕棺（かめかん）が多く発掘されているが、纏向遺跡からの出土品では見られない。そして、割られた銅鐸の小片が発見された。銅鐸が割られていることは銅鐸祭祀の否定の豪族に支配権が移つたということであろう。古代大和の前は出雲の三輪山信仰と銅鐸祭祀であることから、前任者は出雲関係の豪族と推

定できる。

纏向遺跡は、吉備の祭祀である特殊器台、特殊壺、弧文円板（こもんえんばん）や鶏形木製品などの祭祀用具が出土することから吉備の祭祀を受け入れていることが分かる（参照資料ヤミ）。この纏向の勢力は吉備を経て奈良盆地に移動した集団がヤマトを起こしたと考えられている。さらに、木製の鋤（すき）は出土するが、農地の溝掘りに必須の鍬（くわ）は出土しない。農業都市ではないことを意味する。高床式住居、運河・浄水施設（水槽）、水を送る樋（ひ）などの発見があり政治・祭祀都市としての性格を有していることからここに王権が存在したことが分かる。当該遺跡は昭和四十六年（一九七一年）から発掘開始し、平城京とほぼ同じ規模の大きさを有する政治都市であることが判明している。

三世紀後半（二八〇年前後）になると、奈良盆地の統一が始まる。周辺の文化を取り入れ、大和の文化が急成長する。考古学的視点で見ると、「箸墓古墳」という二百七十八メートルという巨大な前方後円墳が出現する（参照資料ヤミ）。埋葬者は、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめ）で、三輪山の神である大物主大神の後である。この墳墓は大和朝廷

が前方後円墳の築造を許可し、地方豪族へ伝播する前方後円墳の代表的墳墓であり、古墳時代の始まりとなった。一方で、纏向ではこの時以降、巫女（女性）の古墳は作られなくなり、纏向以外の地に大王の大型古墳が作られ始める。巫女が神と対話する祖霊信仰から大王が体内に「天皇霊」を受けるという天皇霊信仰が生まれ、

天皇の古墳時代に移ったことを意味している。四世紀初頭には大和に大陸文化も普及することから北九州を制圧し、大陸との交易が進展したことが想定できる。



参照資料4-2: 纏向遺跡と出土品

出典: ウィキペディア図柄引用

弧文円盤

吉備祭祀土器

鶏形木製品



参照資料4-3: 箸墓古墳

出典: ウィキペディア図柄引用

第二話 大和朝廷の統一

古代大和から平城京が誕生するまでの大和は二つの時代に区分できる。ひとつは、聖徳太子が現れ古代大和に政治制度を作られるまでの時代、もう一つは、天武天皇が日本全国を統一し、大和から日本という政治制度を確立するまでの二つの時代の区切ることが出来ます。

古墳時代から聖徳太子が登場する飛鳥時代は、海外との交流が強化され、中国や朝鮮との交易が盛んになる。先進的文化、そして仏教が導入され、古墳文化が終焉する。そして仏教にもとづく飛鳥文化が誕生し、大和朝廷の権力が統合されていく時代でもある。

この古墳時代の四世紀から五世紀の大和では軍事力が強化される。この世紀は第十五代応神天皇と第十六代仁徳天皇から第二十一代の雄略天皇頃までが活躍した時代である。世界遺産になつた古市・百舌鳥古墳群はこの天皇期に該当



〔図2 酒匂本のはり合わせ〕
(東京国立博物館所蔵)

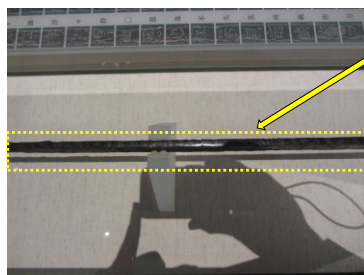
する。朝鮮経営に便利な河内に拠点を移し、大和の勢力を誇示し、軍事力を高めていった世紀である。応神天皇陵428m、^注仁德天皇陵486mの巨大さはその強大な権力を意味し、対外的にも大きな圧力となつたはずである。（注）仁德天皇陵は全長486mで土砂の量は一四〇万平方メートル。人力だけで築くと約五四〇万人・日が必要と言われる。朝鮮半島（新羅、百済）を押さえ、391年には朝鮮の拠点として任那を置く。五世紀の古墳では、天皇陵の周りに陪塚（ばいちょう）と呼ばれる小さな古墳があり、そこには大量の刀剣、甲冑、馬具、鉄製農具、金銀の装飾具絹織物が埋葬されている。当時朝鮮半島では、高句麗が南下し、百済に圧力をかけていたため、大和への軍事支援依頼が百済からやってくる。その高句麗との戦いに向けて武器等を保管する軍事的倉庫と捉えられている。

高句麗の王であつた広開土王（こうかいどおう）が四一四年に建てた石碑、現在の北朝鮮の北端に広開土王碑の碑文（参照資料ヤ）があり、そこには大和朝廷が百濟を助け、高句麗と激しく戦つたことが記されていることから時代背景は歴史と合致する。

第二十一代天皇、雄略天皇期には、仁徳天皇以来の姻戚関係にあつた飛鳥の豪族葛城氏を滅亡させ、また、古代大和の創成期から大王家と同等の力を有してい

参照資料4-5：江田船山古墳②(江田船山古墳銘刀)

出典：ウィキペディア図柄引用



治天下獲口口口大王世奉事典曹人名无利且八月中大鉄釜并四尺延刀八十練九十振三寸上好刊刀服此刀者長壽子孫洋々得口恩也不失其所統作刀者名伊太和書者張安也

<翻訳>

ワカタケル大王(雄略天皇)の時代にムリテが典曹という文書を司る役所に仕えていた。八月に大鉄釜で丹念に作られためでたい大刀である。この刀を持つ者は、長寿であつて、子孫まで栄えて治めることがうまくいく。大刀を作ったのは伊太口(ワ)で、銘文を書いたのが張安である。



ペガサス

ペガサスは物体の重さから解放された魂と精神の不死生の象徴と見なされていた。



鯉

雁

「鯉」は「来(らい)」の意味を持ち、来朝して朝貢すること。「雁」は鳥であり、飛来して情報を怠りなく報告すること。

参照資料4-6：冠位十二階

出典：ウィキペディア図柄引用



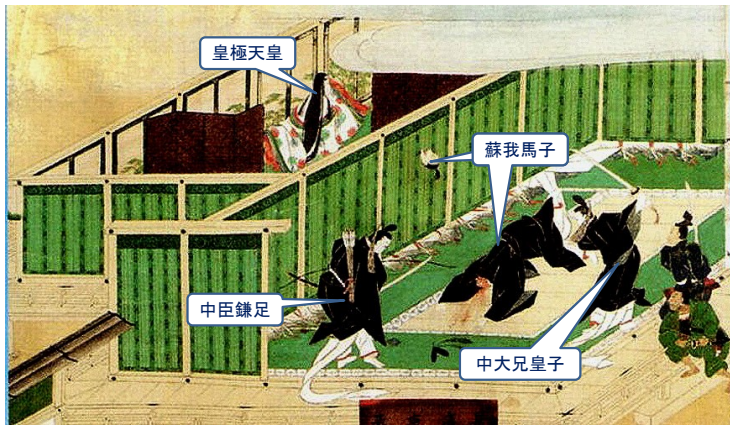
六世紀前半は第二十九代欽明天皇期であり、この世紀には重大なエポックがある。百済からの渡来人が増え、六朝文化の粋が伝わり、百済の聖明王(せいめいおう)は仏像と経典を欽明天皇に献上する。仏教の伝来(645年)である。天皇はこの仏像がキラキラ輝いているのに驚いて、「これを敬つてよいのだろうか?」と臣下に聞いています。今までは神道なので人間の形をした像などありません。神道の神は、鏡、剣、三輪山などの霊山、自然の磐座、神木などです。純粹に驚かれた様子が伝わってくるお言葉です。六世紀から七世紀にかけて大和朝廷は飛鳥に都を移します。飛鳥京跡が六世紀末から七世紀後半まで飛鳥の地に営まれた諸宮を中心に複数の遺跡群からなる都市遺跡で構成されていました。豪族では蘇我氏が勢力を拡大し、仏教導入を支持し、崇仏派を形成します。

た豪族、吉備が大和朝廷に服従させられる。大和朝廷としては、葛城、吉備の豪族を従えて、全国への覇権を確立したと思われる。九州熊本県玉名市にある江田船山古墳から出土した「銀錯銘大刀(ぎんさくめいたち)」と呼ばれる直刀「や埼玉県行田市にある稲荷山古墳から出土した「金錯銘鉄剣(きんさくめいてっけん)」にはワカタケル(雄略天皇のこと)の銘があり、ワカタケルが土地の豪族を恭順させ、贈答したものと解釈されている(参照資料4-5)。(注)「銀錯銘」、「金錯銘」は「銀象嵌、金象嵌(きんぞうがん)」の意味である。

九州熊本県玉名市の江田山古墳から出土した大刀には大刀作成の由来と太刀の柄の近い箇所に絵文字が銀象嵌銘で記述されている。絵文字には不死生の象徴である「ペガサス」、来朝と朝貢を表す「鯉」、情報連絡と報告を示す「雁」が印されている。絵文字を組み合わせると、「長生きし、朝貢と報告を怠るな」の意味になります。

参照資料4-7:乙巳の変

出典:ウィキペディア図柄引用



六世紀末欽明天皇の皇女が第三十三代推古天皇に即位し、甥の厩戸皇子（聖徳太子）^注を摂行（せつこう）させ、蘇我馬子と共に天皇の補佐にした。聖徳太子のもと、直接中国（隋）との国交を開いて仏教等の先進文明を取り入れる。（注）政治の諸事すべてをまかされ代行すること

日本の本格的な古代文化、法隆寺を代表する「飛鳥文化」が花開き、日本での最初の法律である「十七条憲法」を作り発布する。第一条の「和を以て貴しとなす」は特に有名である。憲法内容は行政に携わる官人の道徳的心得に近い内容である。さらに、「冠位十二階の制定」を作り実施する（参照資料4-9）。冠位十二階とは、日本で六〇三年に制定され、六

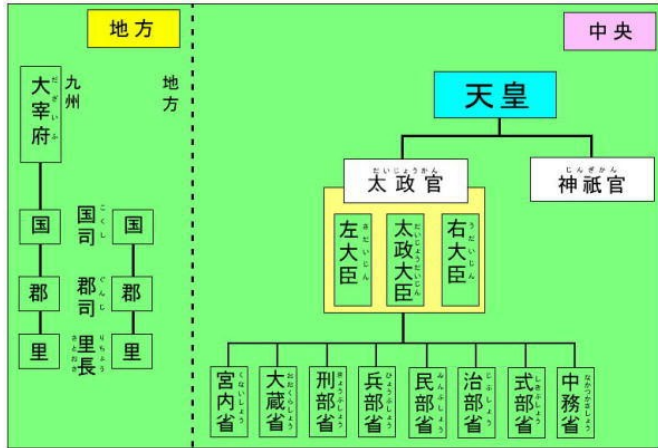
〇五年から六四八年まで行われた身分を表す冠位である。従来は氏（うじ）により官位が定まっていたが、日本で初めての個人評価に対する冠位・位階であり、この制定により人材登用の道が開かれました。遣隋使であった小野妹子は其功績により「大徳」の簡易を与えられていることから分かります。朝廷に仕える臣下を十二の等級に分け、地位を表す冠の色の違いで身分の高下を表しました。最も地位が高い色は「紫」、最下位は「黒」でした。

この頃から、大和から日本の統治へ向けた活動が始まります。六四五年 大化の改新が起点になります。大化改新とは、中大兄皇子と中臣鎌足が蘇我入鹿を倒す「乙巳（いつし）の変（参照資料4-7）」から始まる改革である。蘇我氏を排除したことで、この改革は豪族を中心とした政治から天皇中心の政治へと変わるとされる。皇極四年（655年）六月十四日、乙巳の変の直後、第三十五代皇極天皇は退位し、中大兄皇子に皇位を譲ろうとしたが、それでは天皇になりたいがためにクーデターを起こしたのかと思われるので中大兄皇子と鎌足は相談の結果、皇弟・軽皇子が即位し第三十六代孝徳天皇となり、中大兄皇子は皇太子となり実権を握った。その後、六六八年、第三十八代天智天皇として即位する。大化の改新では公地公民制や班田制など大宝律令の原型が作られた。

天智天皇の崩御後、天智天皇の子の大友皇子と天智天皇の弟の大海人皇子が天皇継承を争い、大海人皇子が勝利し、第四十代天武天皇として即位する。中央集権体制が確立し、天皇の称号はこの時期に出来る。七〇一年大宝律令制定

参照資料4-8: 二官八省の制度

出典: ウィキペディア図柄引用



を制定し、二官八省、国郡里制、班田収授法（公地公民、租・庸・調と兵役）を実施する。

「二官八省」とは、天皇の下に、朝廷の祭祀を担当する神祇官と国政を統括する太政官の二官が置かれ、太政官の下に実際の行政を分担する八省が置かれた（参照資料4-8）。八省とは、中務省・式部省・治部省・民部省・兵部省・刑部省・大蔵省・宮内省をいう。この八省の下にある実務機関として職・寮・司が設置された。天皇主導政治の形態から官僚制度による政治体制への変換である。

「国郡里制」は、地方行政・地方官制の方式であり、一般に国、その下に郡、さらにその下に里を設ける行政組織に編成され、それぞれ国司・郡司・里長が置かれた。役所は国府（国衙）・郡家（郡衙）といい、里は五十戸を単位に組織化し、政治組織として初めて整備し体制化された。

「班田収授法」の制度とは、「土地と人を国（天皇）が管理するための制度」で、豪族の土地も総て国家（天皇）のものにした制度である。班田収授法では、国家から農民に田が貸し出され、戸籍に書かれた六歳以上の男女に与えられ、男子は二段（たん）、女子はその三分の二で、死後は返すという制度である。租庸調が税として課せられますが、天皇、農民共に安心して生きていける国の制度が整いました。この大宝律令は唐の制度を参考にしたのですが、三十卷あつた唐の律令制度の原本が日本の大宝律令では十巻に整理されたことから、日本の科挙などは日本に合うように書き換えや省略して作られている。

七世紀後半になると、八世紀初頭に完成する日本の正統の歴史書、「古事記・日本書紀」の編纂が指示され、「日本」という呼び名が出て、天皇という呼び名が定着するものもこの時期です。国情も安定し、天皇制による律令国家の基盤が確立し、天皇が自信を持った安定した世となったと思われまます。そうして、七一〇年、第四十三代元明天皇期に平城京遷都が行なわれ、七十二年古事記、七二〇年日本書紀が完成します。記紀は天武天皇の命によって編纂が始まります。古事記は、天武天皇の命で二十八歳の語り部、稗田阿礼（ひえだのあれ）の記憶と記紀編纂の前に作成されていたと伝えられ

る史書、帝紀(ていき)及び旧辞(きゅうじ)など数多くの文献をもとに太安万侶が書き記し、編纂したものである。

日本書紀は天武天皇期に編纂を開始した天皇記で、日本の正史になるが、天武天皇、后である第四十一代持統天皇の崩御後、かなりの時間を経て舍人(とねり)親王により編纂され奏上されている。時の権力者には藤原不比等(鎌足の子)がおり、正史としての体裁づくりに影響を与えたと想定できる。記紀の記述の差異からも推し量ることが出来る。

七二四年、聖武天皇が天皇に即位すると、国分寺制度を制定し、国分寺・国分尼寺(こくぶんにじ)をつくります。国分寺の総本山を東大寺とし、法華寺(ほつけじ)を日本の総国分尼寺としました。仏教の教えで鎮護国家を行おうというものです。鎮護国家とは、天変地異や内乱、外敵の侵入にあたって、仏教経典を講読祈願したり、真言密教による秘法を行って国家を守護することをいい、広く仏法によって国家を護(まも)る意味に使用されます。

二年後、聖武天皇は「墾田永年私財法」を發布する。墾田(自分で新しく開墾した耕地)の永年私財化を認める法令である。律令制の公地公民に反する法であるが、日本国土の開拓が進み、租庸調の課税をしたので税收は増えていった。

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM(株) 入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在、古代史の講座をアイプレスジャパン(株) 主催や横浜市地区センター等で学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。

古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」

発行日 令和7年3月22日 第2版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

● 本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com